

## クリスト主観

### 問いかける芸術の意味

今回は布でいろんなもの——小さな壘から巨大な半島まで——を包むことで知られるクリスト Christo (Christo Javacheff, 1935ブルガリア生れ, 現在はアメリカ合衆国に居住)の展覧会である。コラージュ, ドローイング13点のほかマルティブル・コラージュ等を加えての展示であるが, ぼくはこの作家の展覧会ができるのを大変うれしく思っている。というのも, このクリストという作家はぼくにとって現在もっとも気になる作家の一人であるからである。そこで今回はポスターを作成した。また峯村敏明さんにカタログのテキストをお願いし巻頭にクリスト論をお寄せいただいた。感謝している。

クリストは現代の作家のうち, もっともハミ出した作家である。とぼくは思う。平面や立体の仕事からもっとも極端にハミ出している。そのハミ出し方が壮大かつ精力的であるところにクリストの魅力があり, それがぼくを興奮させる。シュルレアリストの画家が画面に事物のあり得べからざる状態を描き, われわれに快よいショックを与えるのを知っている。例えば布で梱包されたビルディングや半島が描かれている絵画はまずシュルレアリズムの作品とみるのが常識であろう。ところが, 彼は実際に半島を梱包してしまうのである(Australian Coast, 1969)。これには全く度胆を抜かれてしまう。シュルレアリズムの実現化, という意味でぼくはまず最初にショックを受けたのである。

有名なランニング・フェンス(1976/9, カルフォルニア)について, 一冊の本ができ, その完成までの一部始終をC・トムキンスがリポートしている。カルフォルニアの海からスタートし野越え, 丘越え, 高さ5.5mの白い布のフェンスは延々40kmを走る。想像しただけでも美しいが, 現実はもっと美しかったに違いない。

ところでクリストがこのプロジェクトを計画し最初のドローイングを画いたのは1972年10月である。4年間の準備期間, 総費用300万弗(約7億円), ぼう大な布, ポール, ネジ等の材料, 畑を傷めない特別あつらえのトラック, 労働力の調達, 公的, 私的許可, 契約, 保険, 説明会, 公聴会, 反対派の妨害等々……。クリストはこの間精力的にドローイング等の作品を画いたのである。このように実現に至るまでの気の遠くなるような諸準備, 行動力, それらを支える強靱な精神力にぼくは感嘆する。ぼくがランニングフェンスのドローイングや写真をみて陶酔的な時間を過す背景には大変なシカケがかくされているのである。

ところが, クリストはこれだけ苦勞して作った巨大な作品を一定期間(ランニングフェンスの場合は2週間)後キレイにとりはずしてしまう。この一時性がクリストの興味ある点である。彼は砂漠でベドウィン族のテントの集団をみたが, 一夜明けたら, そこには何の痕跡もなく消えていたのをみてイタク感動したという。彼の仕事にはこの影響がある。われわれ人間は一時的な存在であるとする考えがクリストにはある。そこにあったもの——それには多くの物語りがかくされている——がスッポリ消え去る

ということで、かえってその存在が強烈に証明されるという逆説的なこのクリストの方法にぼくは共感する。

クリストはいかなるカテゴリーに属する芸術家か、ということになると一寸とまどってしまふ。一応イベント作家ということになるだろうが、ハプニング的なところは全くない。彼の仕事には周到なる計算が背後にあるのだ。この展覧会のドローイングをみれば彼がいかに筆力のある優れた画家であるかがよく分る。彼は勿論、いろんな対象を梱包する立体造型家である。さらに、力学の専門家、科学者を動員するクリストも無視するわけにはいかない。例えばカッセル(西独)での空気の梱包(1968)、コロラド(米)でのヴァレーカーテン(1972)等々をみれば分る。このように彼は多面的でありコンダクターでもある。戦後の現代美術の一つの顕著な傾向として絵画、彫刻、建築各分野の相互乗り入れ、ないしは総合化がみられるが、クリストはそのもっともティピカルかつラディカルな例といえよう。戦後美術も70年代以降は袋小路に入った感じで低調であるが、このクリストは新鮮で、エネルギーに満ちておりぼくの精神の内部に衝撃を与えてくれる。

クリストの仕事はスケールが大きいので、芸術の持つ意味が拡大されたかたちでわれわれに提示される。300万弗(約7億円)も使って、ランニングフェンスなるものを作り2週間で撤去するのは無駄なことだ、とする意見が公聴会であったという。スケールが小さいとこういう問題は表面に出てこないのである。ムダだということは役に立たないということであるが、しかし役に立たず芸術とはそもそも何であろうか? ここには芸術に対するわれわれの価値観が鋭く問われている。

またクリストの仕事は芸術のもつ無償性が端的に表現されている。クリストは梱包したビルディングやランニング・フェンスを売るために作っているのではない。売れるわけがないのである。つまり無償のものを作っているのである。それを作る過程で、ドローイングやコラージュが生れてくるのである。資金調達の意味も含めてクリストは出来上がったプロジェクトを描いているのではない。このようにクリストはぼくに芸術の意味をさまざまなかたちで問いかけてくれるのである。新鮮でいつも気になる所以である。

クリストについては多くの評家が言及しておられるが、わが国では中原佑介さんが作家とも親しく折に触れクリストについて述べておられる。中原さんの「現代芸術入門」(1979, 美術出版社)はなかなか面白い本であるが、その第14話「布をひろげる／布でつつむ、梱包の芸術家クリストについて」はクリストの全体像を知るのにいい。また赤瀬川原平さんが最近出た「季刊アート：春号」(アート社出版, 1982/3)に「梱包を通して」と題してエッセーを寄せておられるのでご紹介しておきたい。ぼくはこの機会に次の2冊を通読する機会をもった。

CHRISTO, DAVID BOURDON(Text), 1970, ABRAMS,

CHRISTO: RUNNING FENCE, G. GORGONI, C. TOMKINS,

D. BOURDON 1978, ABRAMS

この秋には原美術館でクリスト展が予定されているときく。クリスト自身も来日されるという。楽しみにしている一人である。 1982.3.8 佐谷和彦